

冥府訪問記

中島八十一

一昨年臘月、余大病を得たり。

生死の境を彷徨ひたるに、よもや冥府を訪はむとは思ひも寄らじ。

大廈構へたる閻魔庁の入り口に灰色の小さきスチール机ありて、ノート型パソコン置き、胸に大なるプラスチックの名札吊り下げたる長袖白ワイシャツに使ひ古したるネクタイ帯びし夫子あれば、名札に小野篁とあり。左上に小さく参議ともあり。

余の顔見るなり汝何故に冥府に来たる、特段に悪事をなしたる記録なければ、とPC画面眺めつぶやきたり。次いで引導の写しに当たるもの有りやと訊く。余答ふるに何もなしと。しからば自薦書認め、これに持参せよとの由。「我善きこと何もなさざれば、すなわち悪しき一生になり候。善きことなきは悪しきことにて候。しかるに善きこと無きは無き

こと有りに通じ、無きこと有れば即ち有りといふの義に外ほかならずや。そも善きことの有り無しは悪しきことに通ずるものに有らざるならん。悪事に通ずるものに有らざれば、この有り無しはいかなるものなりや、伏して問ひ奉り候」。篁手短に讀みてつぶやけり。「冥府に来たりてなほ屁理屈を述べて何をか願はるる。小生の時間に限りあれば、直接閻魔大官の下にて理屈をこねられたし」。その言終はるや担当官の裏に位置せる火葬場よりさらに幾倍も大なる扉左右に開き、赤き焰轟々と燃え盛る祭壇の中央にほとんど顔のみから成れる、その丈数メートルはあらむかといふ閻魔大官の面前に誘へり。大官余を一瞥し、「何故、この男なるか」と言ひたげなる顔つき成したり。篁余の書きたるもの大官に捧ぐるも手にすることなし。篁に自らの述ぶること書き写すべく命ず。「時下春暖の候益々の健勝奉賀候。此度この男何某臨終に当たりて引導無之候間要件満たさざれば冥府にては受け入れざるものにて候。極楽浄土は南無の一言あれば受け入るるを得むと雖もさは格別、冥府はすべて令によりて処断を見るものにて候。かかる事情能く弁へ、しかる後に冥府に送付すべく御諒察被下度候。閻魔 市区町村戸籍係殿」。篁筆を擱き、素早く退出す。大官顔をわづかに傾げ、余に向かひて野太き声にて宣ふ。「現下汝の冥府に入りたるは迷惑甚だし。冥府にも一定の人間関係あればこそ。思ふに娑婆に戻りていくばくかの間修行を重ねるは汝のためにも冥府のためにも良きことならむと判断し居るものなり。須く納得し、娑婆に戻るべし」。いづくを通りしものか、幾何の時を経たるかは知らねども、余病院の集中治療室にて目を覚ましたり。瞑目して冥府にあること四日と数へたり。

(令和六年二月二十一日受附)